“善し悪し”は子供に反映

教育と言えば、今では皆すぐに学校を思い浮かべますが、教育とは、本来親の行なうべきものであり、親の負うべき最も大切な仕事の一つなのです。

“教”という字の“攵”は、手に教鞭を執った形を表わしていて、古い字形では“父”という字と同じ形をしています。つまり、教という字は、父が子を教え導く姿を表わしているのです。

“育”という字の“⺠”は、子という字を逆さにした形で、子の生まれ出る姿を表わしています。その下の“月”は、“肉”の変形したものです。つまり、育という字は、生まれた子を養い育てることを表わしていて、それは母親の仕事を表わしています。

このように、“教育”という字は、父親と母親のわが子に対する仕事を端的に表わしていて、だから、教育とは、親の、子に対する本能的ないとなみである、ということが出来ます。ところが、文化が進み学問が多岐にわたると、その教育をそれぞれの専門家たちに委任するようになりました。けれども、それは決して責任まで譲ったのではありません。

西欧には、「親は百人の教師にまさる」という諺があります。どんなに学校教育が盛んになり、内容が立派になっても、「百までも」という“三つ子の魂”は親の手によって出来上がっていて、学校はその土台の上に建物をのせるようなものです。同じ学校で、同じ教師に同じ教育を受けても、十人が十色になるのは親の教育が異なるための当然の結果て、「親は百人の教師にまさる」という表現は決して誇張とは言えません。

その意味で、私はこれを「親こそ最高の教師」という言葉で表現したいと思います。この“最高”という意味は、子供に対する影響力が文字通り“最高”だということです。

だから、うまくいけば「親は最良の教師」ということになりますが、まずくいくと「親は最悪の教師」ということになります。

ところが、親は“最良の教師”である場合よりも“最悪の教師”である場合の方が、昔から実際には多かったものですから、孔子やお釈迦様のような最も偉大な教師でさえ、わが子の教育はその弟子たちに任せたのです。とは言っても、そのすべてを弟子に委任したのではないことが、例えば次の論語の一文で知ることが出来ます。

孔子が庭に一人でいた時、息子の姿を見かけると、呼びとめて「詩を学んだか」と尋ねます。

「まだです」と答えると、「詩を学ばないと立派に物が言えないよ」と言って、詩を学ぶように教え諭しています。

孔子の教育では、詩を最も重視していますが、いくら重要な詩でもこれをわが子に直接講述することをしなかったことが、右の事実で知ることが出来ます。と同時に、詩を学ぶことの重要性だけは“教”えていることも知ることが出来ます。私は、これが親の教育の在り方の最も良い手本だと思うのです。